

新収日本地震史料を読む その 2

首藤 伸夫*

1. はじめに

新収日本地震史料5別巻5は安政元年(1854年)の安政東海地震,安政東海東海地震を扱い,巻は5-1,5-2と別れているが,頁は続いており,全ページ数は2528との分厚い資料である。以下の報告で単に(p.19)などとしたものは,この史料からの引用であることを意味する。新収日本地震史料の別の巻からの引用は,例えば新収日本地震史料3巻別巻ならば,新収3別のように略記して示す。また地図はグーグルマップを元に作図したものである。なお,引用古文中の太字部分を読むだけで大意は通じる。

2. 船に遁れて津波の難

日本全国で地震の揺れや家屋倒壊の被害から遁れようと,川・堀・海辺の船に乗り込み,却って津波の害にあった事例は多い。東は静岡県下田市から西は大分県佐伯市まで,そうした例が記録されている。中でも大阪が最大の津波被害を受けたと言って良いであろう。大阪は147年前の宝永4年(1707年)の宝永地震でも,同様の避難行動の結果,多数の犠牲者が生じている。100年以上前の被災経験が忘れられていたのであろう。しかも,不運なことに安政地震の約5ヶ月前,大阪で倒壊家屋が150軒程の地震があり,津波を伴わなかった事が,堀や川の中は安全と云う意識を持たせて居たのかも知れない。

以下に下田,大阪,その他の地点の順に記録を紹介する。

2-1 静岡県下田市

ここには折から来航中のロシア船ディアナ号が被災したこともあって,津波襲来時の状況があちこちに伝えられている。

地震を逃れて舟に乗り,津波の難を受けたことを記録したのに福井県立図書館所蔵の「松平家文書 越前史料」がある。それには,

「豆州下田詰大久保加賀守殿人数之内より領主江注進ニ相越候飛脚之者承り候処,下田辺之儀は去ル四日辰下刻頃大地震ニ付,老若男女を助出し,皆々船ニ打乗逃出候処,俄ニ洪波打上ケ,右之船共悉く波に引込れ,其余湊ニ掛り船致居候大船杯も不残洪波ニ引込れ,且海岸向ニ人家千軒余も御座候処,一統ニ押流れ,纔七八軒程も残り候由,右之通ニ候故,死たる者何程共相分不申との事,」(p.19)

船でも陸に打ち上げられたが引波には取り残されて助かったものもある。同じ下田での記録に,

「下田津浪之節大船陸上壱里半程隔り候山上へ打付られ碎候,中ニ不思議なるハ式百石積位之船山上へ打揚,乗組之者を山へ残し置,船ハ怒潮に引レ去り人ハ助り候由ニ而候」(p.76)

「○津浪ハ下田の異国船も揖を□□(少々,カ)折且し修(マ)中,武具炮器を日本江預ケ候よし,下田奉行并応接方河路左衛門・筒井等ハ纔一刀にて御朱印を首ニかけ逃出し候也,異国人も余程死人有,此方の人も仰山之死だと申候,中ニ漁船七里斗も沖合ニ出居候よし之処,波にてゆり上られ,山手へ人間を一杯ぶち明て人々ハ更ニけがもなく,舟ハずつと引て行て,船頭が多くて山へ付と申事なしとも不被申候,奇代之事ニ御座候,尤実説也,又三保の松原ハ半分ほど引ちぎり,一里もむかふへ以て行候よし」(p.70)

*東北大学名誉教授

流され漂っていて、ロシア船に助けられた記録もある。

1800年代の様々な情報を記した「青窓紀聞」全 204 巻（文献 1）は、尾張藩の重臣・大道寺家の用人を勤めた水野正信が著した当時の記録であるが、その〔青窓紀聞六十五〕には次のように記されている。

「甲寅之十一

大地震海鳴之下

魯船駿海沈没

京都大坂同断

・・・・・・・・

箱根詰之者方申越候書面之内

下田辺老若男女を助け出し、皆船に乗せ逃出し候処、折節津浪打揚、右之船共悉く浪ニ打込レ、海岸向々人家千軒余有之候処、一同ニ押流し、纔ニ七八軒も残候由、右ニ付死人・怪我人等何ほとゝも不相分、乍然公辺初小田原・沼津領主等より相詰候御役人御固人数ハ、武具を初諸色等不残押流し、漸命斗助り、主従とも着の儘にて模寄(ママ)の山手へ逃込候由、且魯西亜船之儀も右津浪にゆられ両三度程もくつかへり懸候様子ニ相見候処、彼船ハ帆ケタ数多御座候由、右帆ケタを左右に結び付湊の内を東西となく廻り居候処、友網等丈夫ニ候故かくつかへりハ不仕候得共、船ハ大破ニ及候由、右之躰ニ而ハ急ニハヲロシヤ本国へハ帰帆成かたく御座候由、尤右船にても死人・怪我人共十人余御座候由、右死たる者ハ日本人を助け候とて死たる様子にて候由、其余ハ半死半生に相成候由、右之趣下田詰大久保殿人数の内より小田原へ注進ニ参り候者より承り申候

十一月十日」(p.73)

ロシア側の記録では、

「日本人を救う

だが、私たちの方も負債ばかりしていたわけではない。フレガート艦が傾斜していたとき、二隻の日本のジャンクが艦の方へ流されて来た。私たちはその一隻からたいそう骨を折って二人の日本人を救い上げた。彼らは当時まだ異国人に接することを厳禁されていたので、心ならずも救助されたのである。三人

目の日本人は、最初の二人の例に従うのを潔しとしなかったので、たちまち小舟もろとも破滅してしまった。私たちはまた、家の屋根にとりすがって漂って来た一人の老婆を助けた。」(文献 2)

その老婆と息子、およびロシア船員の働きについては、青窓紀聞六十五が次のように記している。

「一 盲目の老母を悴背負ひて逃出し候処、火急の事故中々逃る事叶わず、母申候は我は何れにも死せる身なれば爰に捨置て、其方老人此場を通れ、我なき跡を弔ひ呉候様申候得共、母を捨るに不忍見合居候内、高波来り候処、右浪の先へ小船老艘うかみ来る故、是へ母を助け乗せ自分は松の樹へ登り候処、母の舟は三度迄打返し来り候処、木の上にて見て居候処に、三度日に魯西亜船助け揚られ、母子共に孝の徳にて助り候よし」(p.121)

〔豆州下田湊地震津波噺〕には、老母の名前が載っている。

「妥ニ珍敷事ハ、新田町宅右衛門老母八十余才、此者大波ニ打引レ、湊之内を小船にとり付漂流致シ候処ヲロシヤ人小船を浮へ此者を相助ケ候て、外ニ三州三河船水主式人其翌日夷人共三人之者ヲ連きたり候故、諸人其心切(ママ)を感じ候、又不思議と申は大工町辺ニて貧人の娘纔十一才、此者同く浪ニ引れ草屋取付遙沖江流出候処、折しも船老艘間近走り掛候、右之舟之者共是を見付不審ニ思ひ候へ共、先舟ニ引上ケ様子ヲ聞候処、右ハ津浪之次第ヲ泣語り候故舟之者共驚き入候、何と無為方其儘蒲原宿へ着し候、外ニ町中ニハふしぎなる事共多く候得共略之、追々取調相記るし申候、」(p.761)

助けるために小舟バツテイラを下ろし、それに乗り込んで救助に努めたロシア船員も無事ではなかった。

「○西村三郎右衛門来状・・・・・・・・

又津浪ノ節ハツテイラヲ卸シ候処最初ノハツテイラ舟反候由、二度目ノハツテイラヨリ日本人ヲ助け流荷等モ取上ケ相渡候由、右ヲロシヤ舟津浪ノ節候ヲ損シ、舟モ大ニ破損、

アカノ道二・三尺モ入候ニ付、豆州下田ヲ退船、同国戸田浦へ修復罷越」(p.154)

「番船初メ日本船悉く難破ニ及候を見兼、バツテイラ一艘ハ式十人程乗組乗出し候処、二度目之津浪の為ニ相碎レ候敷行衛不知候由、本船ニ而ハ必死と相働、即死人・怪我人も有、之候へ共、終ニハ乗鎮候よし」(p.76)

「船ハ大破ニ及候由、右之躰ニ而ハ急ニハヲロシヤ本国ヘハ帰帆成かたく御座候由、尤右船にても死人・怪我人式十人余御座候由、右死たる者ハ日本人を助け候とて死たる様子にて候由、其余ハ半死半生に相成候由」(p.73)

当時ロシアとの交渉のため下田に滞在していた川路聖謨の〔下田日記〕には、「魯西亜船も三人迄助けたり。魯人のはなしにては、同船脇を百人も、其余も通りたりと也。魯人は死せんとする人を助け、厚く療治の上、あんままでする也。助けらるる人々、泣きて拝む也。恐るべし。心得べき事也。」(pp.749-750)

〔下田はなし〕には、「明れバ六日となり・・・

危急なる場合にて日本人流れしを余程助けし其中に老婆一人流れ来て碇の縄に取付を引上げ舟へ載せけるに最早性体なかりしを温め杯し色々と介抱政し遣すゆへ命助かり帰りけれハ辱なしと其後ハ異船へ向ひ日々手合せてぞおかむよし其深切を聞もハ皆々感服致けり」(p.785)と事後処置の丁寧さを伝えている。

2-2 大阪

大阪での事故が最大であろう。これを記載した資料は多い。

その中から、大阪西区役所編・発行の〔西区史 一〕によれば、次の通りである。

「安政元年十一月の地震と津浪

安政元年(嘉永七年)十一月四日、五日に亘りて近畿地方を中心として襲来した地震は、同年六月十四日の地震に比して更に強震であり、然も大小数十回に及び、四日の辰ノ下刻(午前九時頃)と五日申ノ下刻(午後五時頃)の二回は最も激震であった。市中の者は慌て、戸外に逃げ、道路や蔵屋敷浜に苦や延、

ござ等にて家根を作った仮小屋に野宿し、或は茶船、上荷船等を借入れて之に乗って難を避け、大阪市中で家の中にある者一人も無しと称する有様であった。其騒ぎと恐怖の上に、五日の夜九時過ぎに俄に大阪湾より海嘯が襲来して、大船小船の別なく一瞬の間に微塵に破滅し去ったのであるから、其惨状は真に想像するだけでも甚大なものであった。此地震の状況は大阪市史を始め堀江誌其他幾多の文献に引用せられてあるから、本書は之を省略し、当時江戸堀二丁目に住した高津屋と称する人の手記より抜粋して概況を察する野史とする。

大地震大津浪

嘉永七甲寅十一月四日朝五ツ時大地震に付家并土蔵高堀大損し(中略)京町堀羽子板ばし北詰角四五軒崩れ、両国橋かご屋町角、間口拾七八軒崩れ、北久太郎町并池北へ入四五軒崩れ、永代浜大土蔵崩れ、座摩社石鳥井みぢんに崩れ、絵馬堂惣崩れ、北堀江四丁目五六軒崩れ、阿弥陀池裏門一筋西ノ辻南へ四五軒崩れ、幸町東ノ樋より南へ五六軒、堂島桜ばし南詰西へ七八軒、順慶町并池東へ二軒崩れかゝり、本町狐小路浄土寺塀崩れ、上福島天神ノ門、井戸家形、江戸堀老丁目加島五横町塀崩れ、天満天神、御霊宮、いなり、高津、皆井戸家形崩れ、絵馬堂大にそんじ淡路町中橋大道われる、安治川三丁目十四軒崩れ、同所順正寺茶ノ間、本堂、残らず崩れ、立売堀中ばし両側崩れ、高松金毘羅百度場并二絵馬堂崩れ、延岡生月八幡宮井戸屋形并絵馬堂崩れ、広島米蔵、筑後米蔵崩れ、其外所々損し家数しらず并げが人死人も地震ニ付少々有之候得共多くの事故筆まわらず、同五日七ツ半時より大地震又々はげ敷ゆり出し候故、市中人々大キニあはて船へかけ乗又は大道并二屋敷ノ浜などへ苦并ござなどで家根出来、皆々其所に野宿し、家の内に居るもの市中ニは老人もなし、同五日暮六ツ半時より津浪、右地震に付船へにげこみ候人々哀れ大津浪ニ付、千石、又五百石、千八百石、小船、上荷船、家形船、大損じ右津浪ニ付大船浪ニ追れ、内川へ乗込逃るゝ間もなく大船にしか



図 2-1 大阪関連地図

れ水死人する者凡六千余人，其余けが人数しらず，大船三百余艘，小船八千余艘くだけの，其外破損船は何艘と言ふかづしれず，大船川内へこみ入，橋々落たるは道頓堀川にては日吉橋，幸橋，住吉ばし，**大黒橋**にてとまる。(註；大黒橋は道頓堀の奥，尻無川の河口から約 4.7 km の場所にある)。かな屋橋崩る，堀江川にては水分ばし，黒金ばし，長ほり高橋，江ノ子島ノかめばし，安治川ばし落る，其外近在水損場ハ寺島，泉尾新田，勘助島，今木新田，月正島，なんば，木津右いづれも田畑へ津浪ニ付水入大損じ，まづ右ニ記る (ママ) は大坂并ニ近在荒増記ス (中略) 右のごとくにて水死せる人々江ノ子島，下博勞，道頓堀，下堀江，幸町などまことに数多き事也，津浪安治川ハ大イニ損し候得共なほ々々**道とんぼりハ誠大津浪なり**，死人も九分半ハ道頓堀，木津川筋なり，野子も翌日大黒ばし辺へ見舞ニ参り候て所々見物致す所，中々聞しに増る大へん也，**大船ハ大黒ばし迄詰かけ，川中ハ小船壹艘通ることあたわず**，夫より下住吉ばし上

手下手ハ南側ノ方へ右大船のためニ家をつぶれ又蔵へ船ノみよしつきぬけたるも有，水死人々あちらに百人こちらに三十人まこと々々船ノそんじと言ひ哀れ至極也，右死人并ニ損失人願番所幸町辺へ出張所出来候，死人は公儀より御れんみんに付けんしなし，千日ノ墓朝よりそうれん沢山也，誠ニ千日ハ朝からそうれん引継なり，幸町下博勞辺は老家死人三人五人七人家々は誠にそうれんノ見あき致し候 (下略)

とあるが，両川口，殊に日吉橋，幸町五丁目方面の被害は特に甚大なるものであったと察せられる，幸町五丁目大正橋の東詰に西面して建立されてある『大地震両川口津浪記』の碑は，安政二年有志に依りて建てたものであるが，よく当時の状況を記し『すべて大地震の時は津浪起らんことを兼ねて心得て必ず船に乗るべからず，家崩れて出火あらん，金銀証文蔵めて火用心肝要也』と，津浪に対する後人の心得を教へ，且つ遭難者の冥福を祈ったもので，刻された文字の言々は当時の惨

状を永久に物語る珍らしき記念碑である。」
(pp.1509-1510)

地震を避けて堀の小舟に避難した人々が、津波そのものではなく、津波で運び込まれた大船の下敷きとなって死亡したという。大船は橋も落とした。こうした状況を伝える書状がある。

「大坂岩井七郎兵衛方横山直助江之書状之内

一 去ル四日之地震ニ而津浪出て、天保山は大崩ニ相成申ニ付、川口御番所も余程損し候由、亀井橋安倍川橋とも大船逆登ニ入込、帆柱ニ而両橋とも落し切候由、其余色々申沙汰も有之候得共、区々付、達上かたく略いたし申ニ付、則絵図式枚指上候、御披見可被下候

大小船 難船 百八拾艘斗 天保山江打あけ候舟にか

溺死人 五百人余り之由」(p.4)

被害状況の数字は様々である。板倉撰津守家来福目与市の報告には、

「昨日迄之処届濟之溺死凡三千余人、其余如何様共相分不申、其中ニは不思議ニ命助り候者も有之、生死ニ付而ハ様々あわれの咄しも有之候得共くた々々しく、相略候、破損之船大小打交り、八百八十艘と申事ニ而、橋落候分拾五ヶ所、先荒増申候段在所表方申越候、追而取調可申上候得共、大坂加番中ニ付、家来之者方先御届申上候 以上」
(p.26)

〔青窓紀聞 六十四〕には、大坂商家来状として、

「夫よりも氣之毒なるハ津浪前の地震ニ老人・婦人・子供など多く皆地震を恐れて船へ逃込候も是又数万人也、然ニ俄ニ津浪と成り、上陸の間もなく水死に及びし者幾千幾万とも数不知、其夜方翌六日迄ニ上りたる死骸八百余夫方毎日船の下方日々死骸百人・百五十人以上上り、且又死骸をさがし居る人ハ夥敷、船頭死人も夥敷おそろしともいたましも難尽筆紙候」(p.61)と記録している。

「十一月五日暮方ヨリ沖雷ノ如クウナリ、高一丈余り大波カサナリ打来リ、天保山ヨリ泉尾新田勘介島今ギ新田月正島木津村新田難波島此近辺ノ新田大津浪ニテ家根上り候人ハタスカリ、其外舟ニ乗候人・舟ノリ船頭・新田ノ人々死人有凡千五百人トモ二千人トモ数シレス、千五百石已上三百石已上ノ大舟道頓堀へ入込其外上荷茶舟テンマ下敷ニナリクタク候舟数不知」(p.141)

「○大阪土井一郎来状

・・・・・・・・

五日同断、午時大分劇、申下刻大劇、・・・・・・其夜酉中刻比海溢、安治川・木津川トモ泊船不残川へ入申候、安治川橋・亀井橋共其時落申候、川口ノ御番所前ニテ二千石斗ノ船五艘入込候、破船甚多分未数相知レ不申候、上荷其外小船ニテ地震ヲ避罷在候者ハ不残大船ノ下ニ乗沈ラレ、今日溺死凡二千人ト申事ニ御座候、・・・・・・今日モ小船ノ敗船トモヲ町方火役人ヨリ皆々切毀、川路開キ候ニ、水見へ候処、死人浮上り申候、大抵女子多分ニ見へ候、皆々地震避罷在候人ト相見へ申候、一昨日凡二千人ト申候共、今日ニテハ三千モ有之改ニ申候」(p.148)

なお、入り込んだ舟数、落ちた橋などは(水代録四ノ下)に記してある。

「地震ニ付、御公儀へ書上之写
安治川通船津橋迄入込分
一 八百石積より五六十石積迄
凡百四艘
外ニ破船、三百石より四五十石積迄
凡式十艘
木津川口通土佐堀川筋へ入込分
一 千五六百石積より五六十石積迄
凡四百五十艘余
外ニ破船、三百石積より五六十石積迄
凡五十艘余
立売堀下上手百間堀迄入込之分
一 八百石積より式百石積迄
凡拾五六艘
外ニ破船、百石積より(欠)

- 式艘
長堀川筋玉造橋迄入込之分
一 四百石積より五十石積迄
凡式拾壹艘
外ニ破船，五十石積
四艘
堀江川筋瓶橋迄入込候分
一 千五六百石積より六十石積迄
凡五十艘
外ニ破船，式百石積より六十石積迄
凡四艘
道頓堀川筋大黒橋迄入込之分
一 千石積より百石積迄
凡百三十八艘
外ニ破船，式百石積より四五十石積迄
凡九艘
新川へ入込分
一 百石積より四十石積迄
凡六艘
内川江入込候分，破船共都合
八百七拾九艘
此内破船八十九艘
右川内五十石以下并川船 天道船 上荷船 荷茶船 家形船
数艘破損致候へとも，員数未難相分候，尤
死人・怪我人等未不分
橋落候分
安治川橋 亀井橋 長堀高橋 水分橋
鉄橋 日吉橋 汐見橋 幸橋
住吉橋 金谷橋」 (pp.1498-1499)
落橋について別の記録〔御用留〕では，
「又橋々
道頓堀 日吉橋 幸橋 汐見橋 住吉橋
ほりへ 水分橋 黒金橋
長崎 高橋
江ノ子嶋 亀井橋
安治川西橋堀 金子橋
右は不残落橋いたし候」 (p.1537)
となっており，若干の相違がみられる。

津波に運ばれたものの難を逃れた船もあった。
(住友家史垂裕明鑑抄乾)によれば，
「此海嘯ニ不審ニも危難ヲ免レシハ，予州

ヨリ銅ヲ積来リシ伊勢丸ト云フ船ニテ，日吉
橋ニ碇泊セシカ，忽チ潮水ノ逆流ニ追ハレ，
大黒橋南詰マテ押シ上ケラレ，上荷船三四艘
ノ下ニ為リシカ，船体モ破損セス，船頭・水
夫モ負傷セス，無難ニ居ルハ奇ト云フヘシ。
因テ船頭林兵衛へ金式百疋，市蔵へ銀三両，
水夫三人へ金壹分式朱，船中一同へ銭壹貫文，
酒五升ヲ祝トシテ遣ハセリ……………」
(p.1501)

津波は川や堀の中を高くなって進んだが，
両脇の岸へはあまり浸水しなかった。(波速
之震事)によると，

「爰に不思議成は，斯の如き大船数艘を一
時ニ内川江突入る程の洪濤なれば，浜側の
家々・土蔵・納屋等ニ至る迄，半は水につか
るへきに，至而低き地面は往来際迄水来り，
又少し高き所は浜石かけ半方水上らず，左あ
らは，洪波の時ニ望んで川の真中へ水盛上し
如くにて，数船を持来しし物か，寄(奇)なり，
怪也

但し，高汐引し跡跡三寸計，浜側の石かけ
ニ残り有」(p.1503)

この2-2節最初の記事〔西区史 一〕の書
き出し3行目下線部のように，5ヶ月ほど前
に地震があった。此の時には津波を伴わない
地震であった事が，川や堀への避難に影響し
たとも思われる。その地震は

「(波速之震事)

嘉永七甲寅年六月十四日夜丑上刻，諸国大
地しん，其中ニも伊賀上野・勢州四日市・和
州郡山・奈良等別而強く，崩家・死人・怪我
人・火事等も有之，大変云はかりなく，大坂
表は騒き中にも崩家少く，死人等もなければ，
十四日丑上刻より十六日度々震り，夫より廿
四日迄は昼夜に六七度，四五度も震ぬ，其後
閏七月廿日比迄，時々少シツゝ震れと，次第
ニ揺薄く成りて，いつ忘るとなく地震の沙汰
もやみぬ」(p.1502)

この地震は伊賀・伊勢・大和および隣国に
影響し，例えば奈良で7, 8百軒，大阪府で

145 件未満の家が潰れたが、津波の記録はない。(文献3)。

その結果、安政大地震での被害につながったとの見方も出来よう。大阪から遠く離れた宮崎県での文書にそうした推測が書かれている。

〔北川村郷土史料集 一号〕○宮崎県東白杵郡甲斐家文書(謄写印刷)

安政元年寅十一月五日方

大地しん控

京、大阪ハ火事ふせや。此年六月地しん時ハ舟に乗りこみ、水のなんをのがれたるゆへ、此度の地しんには、舟々ニ乗り入川ものハ壱人もたすかり不申、ほり川をなかるゝ人、木の葉の水にうかみたるがごとく、又さいき御城下近辺ハ塩道凡平地より壱丈壱尺斗り上る。」(p.2528)

それにしても、過去の大被害の記憶は全くつながって居なかったのであろうか。地震を避けて船に乗り、多数の死者が出たのは、これが初めてではなかったのである。安政元年(1854年)より147年前の宝永4年(1707年)の宝永地震では全く同様の災害が発生していた。その時の教訓が伝わらず、舟に乗ると言う行動が再び起こったのである。その時の記録を以下に引用するが、年月日を入れ替えさえすれば安政時の記録と言っても差し支えないほど似ている。

宝永地震での記録を、同じ大阪府史料〔西区史 一〕に見よう。

「一 地震と海嘯

宝永四年の地震と津浪

宝永四年十月四日、晴天にして暖かな日であったが、午の下刻(午後二時前)頃、南西の方に地鳴りすと思ふ間もなく大地震となり、鳴動次第に激しく一時間余りも続き、江戸堀、伏見堀、立売堀、堀江新地を始めとして、心齋橋筋の建家は残らず倒壊したので、町民は恐れて家財道具と共に、我も我もと船に乗り移りて難を避けたが、申の上刻頃(午後四時)より木津川口に、一ノ洲の海底より俄かに泥

交りの暗黒色の大海嘯が湧き上り、二十丈許りの高さで難波島、三軒屋、前垂島に襲来し、人々は慌てふためきつつ上町方面に難を避けたが、地震を恐れて上荷船、茶船等に乗って居た者は陸地に上る間も無く、あわやと云ふ間に大潮に押されて逆流し、川口に繋ぎ置きし諸国の大船と共に押上げられて橋を突き落とし、小船は大船に挟まれ或は激突して碎かれ、多数の悲惨なる死人を出した。道頓堀川は日本橋より西の橋、堀江川は堀江橋迄、土佐堀川は渡辺橋迄の橋は悉く落ち、寺島、勘助島、上下ばくろ辺の家々は流され、阿波座、新鞆町、京町堀は崩れ、雑喉場は大半崩れ、残れるは流され、鯉座は残らず崩れて死人夥しく、町民は御城端に逃れ集ふた。無事であった町々も店を閉じて商売を休み、漸くにして七日目位より店を出したが、其後は半月程も余震が続きて執れも戦々競々たる有様であった。此地震で各町は辻番を設けて警戒した為、火災の起ら無かった事は幸ひであった。」(新収3別 p.360)

また、大阪府〔南北堀江誌〕でも、

「宝永四年の地震と津浪

宝永四年拾月四日壬午、この日は風なく一天晴れ渡り、その上暖かな日であった。然るに午の下刻、(未の上刻ともあり)南西の方の地鳴り震ひはじむ。鳴動は次第に激しく約半時余りはやまず、天地も覆るかと思はれるばかり。江戸堀・伏見堀・立売堀・南堀江・北堀江新地辺の建家をはじめ、心齋橋筋北から南迄の建家不残つぶれ、其外家屋舗橋市家一軒も無之(大阪諸国大地震大津浪並出火・宝永四年亥十月四日大地震之事)といふ有様。恐しさの余り生きたる心地の者老人もなく、此上再び強く揺りなば逃がること叶はざれば、家財道具を船に積み老若男女も船に乗るこそよからめとて、人々は我も我もと船に乗った。然るに申の上刻頃から海底どう々々と鳴り出し、何事ならんと驚く折しも、木津川口一の州の海底から、俄かに大潮湧き上り来ること高さ凡そ二十丈許り、泥交りの水なればその色は暗黒である。難波島・三軒屋・前垂島の人々は之を見て、すは大潮来る

と呼はったから、市中の人々慌てふためき、寺町さして遁げ去り、押合ひ突き合つて雑踏混乱を極めた。

かくて『地震を恐れて上荷船・茶船に乗移りしものは、陸地に上る間もあらばこそ、此大潮に押されて、其の船は逆のぼりけるに、川口に繋ぎ置かれたる諸国の大船も、亦同じく此大潮に押され、橋を突き落して、矢を射るが如く押上げられければ、人の乗れる小船は之を避くる暇もなく、悉く大船の下敷となりて、或は水底の藻屑となれるもあり、或は船と船とに挟まれて、上に昇らんとし船に碎かれたるもあり、又大船より棹を出して助けんとすれば、三人も五人も取附きて棹と共に取落されて溺死せるもあり、暫時の間にして諸橋残らず落されて、日本橋まで押され来り、同橋より川口まで三艘五艘と重り合ひ、千石・二千石の船は、帆綱帆柱かけながら、小船を重ねて下敷となし、船の重れる其間には人の屍骸浮きつ沈みつしけるが、南堀江・北堀江・伏見堀・江戸堀・新堀・堂島・土佐堀・西横堀等の諸川も同じく多くの死者を出し、附近村落の損害も亦少なからず、津守新田の如きは堤防決潰して海水瀾漫せりといふ。』(大阪府全志)」(新収 3 別 pp.367-368)

以上に記されているように、津波で大きな船が押し上げられ、これが橋を壊し、小舟に乗り上げ、人々を押し殺したのある。

2-3 その他の地域

地震の揺れを船に避け、続く津波で命を落とす例は全国あちこちにあった。船に乗って難を逃れた例、147 年前の経験が伝わっていた例もある。

(1) 三重県伊勢市

「一 大港(注:伊勢市大湊のことであろう。前後に内宮下宮の事がある故)地震の時に人々川船に乗りしかば、津浪の為に大船内川に押上られしかば、小船ハ下敷となりて皆碎け、七十余人死たるよし、殊に川中に大船

の帆柱とすべき大材木水にひたして打しが、津浪に押上られ家蔵につきふして家蔵ミじんに碎けたり、此辺に田地の中に大船津浪に押上られ、動かす事なり難く其儘にありしよし、打こわすにも新たに造る程の費かり(マ)て云り、川崎辺も津浪にいたミ多きよし」(p.293)

(2) 静岡県沼津市

例えば、志摩国大地震大洪浪混雑記には

「一沼津宿之儀ハ八分通り倒家ニ相成、其外不残大破、即死十三人、船ニ而逃候者又々津浪ニ而即死いたし候者数未知・・・・

嘉永七寅年十一月五日 御石場預り沼津宿本陣 中村九左衛門」(pp.57-58)と報告されている。また

「沼津和田伝兵衛方富樫方江来状
一当月四日辰下刻頃之大地震、貴地如何御座候哉、御案事申上候、当地之儀荒増左ニ申上候、四日快霽、風も無之候所、辰下刻震候へとも、例之事と存候処、忽震動甚敷、小子義ハ妹婿供々直様隠宅へ駈付、老母・妹・愚妻一同召連河岸へ出候処、折節小船有之候間、右ニ打乗候処、宿内出火之煙相立候ニ相驚、小子のミ陸ニ下り候やいなや湊之方方高六七尺之津波押来候間、其船陸へ付よと差招候へとも最早七八間も沖へ出候事ゆへ不及力、頻ニ歎息いたし居候内、津波押来り陸地壺丈註忽打寄候へとも、右之小船危くも覆らす、少し心落付候得は、右之煙ニ再び家ニ立帰、家族とも々々筆筒之類引出候処、右出火暫時之内ニ相鎮安堵仕候」(pp.198-199)

「重須 土屋伊左衛門様 御もとに
沼津 松田伝兵衛
・・・・

手前方も地震と申候と老母家内裏方船へ乗、既ニ危く候へとも運よく相凌申候、子ともハ五ヶ所に散乱いたし居候へとも是も無事ニ相凌申候、乍憚御休慮可被下候、右御見舞申上度草々 頓首

(嘉永七年)十一月十一日」(pp.655-656)

(3) 三重県津市(図2-2)

藤堂家の本拠であった津市では
「藤堂家飛脚の咄し

右地震に御城并住居向共損し、侍屋敷凡千八百軒程損、内二分通り損し也、町家は二分通損し也、八幡町は十一軒丸潰家、廿二軒半潰、残りは損し也、右地震は同時に高汐にて城下へ水押上、町中岩田橋上へ水三尺余上り候由、石橋の際に菓子やにて山北屋・蕎麦やにて三ツ星屋と云有之、二軒共津浪にて種なし(ママ)に相成、其外四・五軒家損し候よし同日御届右岩田橋脇寺町入口極楽橋際に旭床と云髮結の娘、右地震に驚き前に有之舟へ飛込候処、津浪にて船をくつがえし死す也」(p.116)とあり、続いて狂歌「日の出なる今を盛りの旭床 弘誓の舟に乗って極楽」が記されている。現在の岩田橋は河口から1.5km程の所にある。

また

「○勢州津河辺忠四郎来状 今五ッ半時比去夏一倍ノ地震巖シク震動御座候、町方ハ不怪大破、崩家モ八・九軒有之、人々驚候処、四ッ時前海荒泥汐押登り、極楽橋落申候、夫ヨリ岩田橋半田橋辺ヨリ西マテ押登、水勢甚シク、高浪ニテ築地浜辺ノ者地震ヲ恐、舟ヘ向逃乗候モノ右汐先ニテ岩田橋橋杭ヘ押付破舟イタシ、死人五・六人モ有之、其節町内下役橋上ヘ取掛り一兩人助命致シ遣シ候由承候、右高浪ノ風説様々ニ申立候ニ付、町方ハ勿論家中



図 2-2 津市関連地図

向モ多分北山へ立退候モ有之、誠ニ誠ニ何レモ当惑仕候、併シ早速右汐引口ニ相成、少シハ安心仕候」(p.144)

(4) 三重県鳥羽市

ここにも、地震を恐れて船に乗った記録がある。[鳥羽志摩新誌]には、

「○津波と飢饉

○安政地震と大津波の記録(部分的)

安政元年申寅十一年四日朝、五ッ半頃、俄かに大地震あり、引きつづき大津波にて鳥羽御城内に於ても、諸々の高塀残らずくずれ破れ、御玄関前は上の柱之根迄汐が襲来、尤も御門は残り、又、御馬の儀は八幡山へ登り助け、尚、御家老始め家中の御宅々も右同断、相橋門は残り、岩崎の家々も大方いたみ、福泉坊はみぢんにくだけ、其他板割割場の家々等残らず流る。

本町口御門も打倒れ、その後、万力にて之を起す。本町は半分位浪波につかり、片町は常安寺迄汐行き横町は光岳寺御門の石面まで汐来りて、升形のみは残りたり、御堀の儀は行きぬけに相成る。中之郷は一軒も残らず戸障子、たんす、長持ち等の類、皆々流れ行く様は大海に浮びたる船の破船したるが如し。

勿論、始めの地震に恐れて船に乗りたる人ありて、此の時五、六人死す。又、川岸ばたの家々は或いはたおれ、又はくだけ、横町、藤も同断。」(p.1315)

(5) 和歌山県御坊市(図2-3)

和歌山県日高郡(現:御坊市)でも

「四)日高川を遡る小舟は木葉の疾風に散るが如く、岩内社前大野に輻輳して、或は傾き、或は破る[野口村誌]吉原にては、洪浪、田井の切戸を越ゆるに至り、避難せんとして、舟を西川に浮べたるが為め、却つて沈没溺死せし者あり」。(p.1602)

是を悼んで石碑が建てられた。(浜ノ瀬青年会場の石碑津浪之紀事)に、

「後世もし大なる地震の時は、必ず津浪起ると心得て浜中の人々は太松原の小高き所に集り居るべし。さあれば高浪の患へはた地



図 2-3 御坊市関連地図

震の恐れなかるべし。舟などに、遁となすべからず。諸人此事をゆるかせに思ふまじきもの也。

因に曰、嘉永七寅年霜月五日の大地震つづいて津浪起り来れり初め地震を避んとして、舟に乗り川内に浮び居し輩沈没せしこと誠歎し。よって後世之為に其あらましを録し畢りぬ

岩文久壬戌のとし夏五月良日
木村理三郎
藤井 瀬戸佐一郎義健建之」
(p. 1607)

(6) 和歌山県有田郡湯浅町

和歌山県有田郡湯浅町の〔湯浅町誌〕には、
「深専寺大地震津波心得の記碑
.....

(正面) 大地震津なみ心え之記
.....

翌五日昼七つ時きのふよりつよき地震にて未申のかた海鳴ること三、四度見るうち海のおもて山の如くもりあかり津波といふや、いな、高波のうちあけ、北川南川原へ大木大石をさかまき、家蔵船みぢんに砕き、高波さし来り勢ひすさましく、おそろしなるといはん

かたなし、これより先地震をのかれんため浜へ逃げあるひは船にのり、又は北川南川筋へ逃れたる人のあやうきめにあひ溺死の人もすくなからず、すてに百五十年前宝永四年の地震にも浜辺へにけて、つなみに死せし人のあまた有之となん、聞つたふ人もまれまれになり行くものなれば、この碑を建置くものそかし、.....」(pp.1627-1628)

(7) 広島県福山市

〔備後福山藩災害史考〕には、

「(参考)

◎大地震・大変ノ控

備中国小田郡笠岡村大津屋安兵衛覚書

.....

其夜五ッ時、又々大地震ニ相成申候、皆々我家ニ居るものハ耆人もなく、浜べ・船・山・川エ退ケ出し候」(p.1710) とあるが、被災したとの記述はない。

(8) 広島県尾道市

〔新修尾道市史 四〕○広島県 S50.3.31 尾道市役所発行

「嘉永七年富浜地震 嘉永七年(一八五四)甲寅十一月四日間五ッ時地震。五日晩七ッ時大地震。凡半時計不止、市中大混雑、誠ニ是迄不覚事、家並皆々門丘へ逃出候。.....余り之事ニて内ニ居候者ハ耆人も無之、早々内ヲ片附門丘へ畳ヲ敷、屏風ヲ在出候も有、寺社へ同様逃行候者も有之、船ヲ借家内不残船へ乗り候者も有之」(pp.1718-1719) ここでも被災して居ない。

(9) 徳島縣海部郡海陽町(図 2-4)

〔宍喰村誌〕

「愛宕山へ逃登し五百七十二人其余は祇園八幡又日比原尾崎広岡辺迄、家内別れ々々にて逃散、浜辺に居合る者は其儘船に乗候処、逆浪に打返され溺死に及、程能く川筋古目辺へ流入助命に及候者も在之候へ共、必右様の節は舟などに乗へからず。諸々にも船に乗り多く溺死に至り片時も早く手近山に逃登にしくはなし。」(p.1875)



図 2-4 穴喰村関連地図

(10) 香川県

(三宅家文書) ○香川郡御料直島

(表紙)

「天保十四年卯正月

諸事願届書類留

藤方彦市郎様御役所方

乍恐以書附御届奉申上候

讃岐国直嶋三ヶ嶋当寅十一月四日朝五ッ時分初而地震有之、同夜九ッ時分又候震動仕候得共、為差用意も不仕候処、五日晚七ッ時分於当国辺ニは不及承古今稀成大地震

……所之人民一同恐怖仕、早速船ニ取乗見合せ候内、追々小ゆりに相成候得共、湊内汐行無定時之間ニ、東西南北江行立、平日方は十倍之早汐と相成、一夜之内ニ五・七度も満干有之候、尤大地震之節は津浪高汐御座候由兼而申伝も御座候得は、猶以難致安心候ニ付」(p.1950) ここでも潮は変化したが被災してはいない。

(11) 高知市 (図 2-5)

〔土佐国大地震并御城下大火事且大汐 実録〕高知県図書館

「嘉永七甲寅年十一月五日土佐国大地震并御城下大火事

且大汐入之実録之事……香川郡御料直島

一突浪之時高須村之川江も家式軒流来候、其浪初而打来候時、高サ四・五尺重り来候、



図 2-5 高須位置圖

依右前方口船ニ乗居候人は船覆る、初之浪方跡ハ平日之高浪なり、船に乗ニ而も不苦」

(pp.2111-2112)

(註；高須村：現高知市南東部)

(12) 須崎市

〔嘉永申寅年大地震筆記 徳永達助記録〕

○高知県高知市立市民図書館

「徳永達助筆記十一月大地震覚書

一須崎ニテ漁師船ニノリ、勿論家内一同乗り申処、波ニ被取船カヘリ、不残沈ミ、十二・三歳之子老人浮上候処へ、大筒之坐板流レ来取付キ居申候処、夜須ノ漁船ニ被助、同所へ来り候趣、高辺栄三郎殿高知戻リ之道ニ而聞申とて承り申候」(p.2127)

〔真覚寺日記 (地震日記)〕

「今日須崎より帰りの男の咄を聞ニ此間之大波ニ浦人三拾余人死失之由其中多く大汐入ル事をする儘直ニ浜へ走り出船ニのり其難を

通れんとせし浪高くしての事も出来かたく兎や角する内船と船との間にて摺きられ五体半分ニ相成死せしものおふき趣」(p.2255)

(13) 高知県安芸郡東洋町甲浦

〔嘉永土佐地震記 全〕高知県立図書館

「一桜屋手代吉良川辺江取立ニ行帰り御屋敷江参り咄左之通

甲浦不残流失死人七拾人斗但舟ニ乗り汐を凌候趣之処舟損し如此」(p.2177)

(14) 高知県

〔大変記〕○高知県 高知県立図書館

久枝邑の者七人斗川船に乗組物部川々尻より人家へ入込汐に上江々々と馳登らんとする所へ夫婦の者子一人背に負い来申様何卒其船にて命助け呉度様頼入所彼乗合の者返答には見及の通小さき船に候得は便船叶ぬとて込入浪に鱸押立々々する所彼曳汐に大坂の如く逆巻浪にキリ々々と巻込れ影も形ちも不見得と云其時彼夫婦子連れの者茨に取附助る仍て船には乗へからず」(p.2186)

(15) 高知県土佐市(図2-6)

〔真覚寺日記(地震日記)〕○土佐市宇佐町S43～S47 井上静照筆・高知市市民図書館

「此時山を目当ニ逃しものハミな命を助かる船ニのり難を遁れんとせし者ハ溺死多し沖より波来るのミニあらず海近キ土地ハ下夕より汐を吹出スもの也能く心得有たし」(p.2250)

「福嶋浦・・・去年霜月五日大浪の砌親子三人連にて家を逃出船ニ乗り潮ノ難を遁んとする二船くつかへり壱人も残らず溺死せり」(p.2268)

.....

「同十三日(註:安政5年8月)

晴天(中略)先達而供養せし御経塚の碑文をくわしく一見し帰る其文左ノ通

安政元申寅歳十一月五日申の刻大地震日入前より津波大ニ溢れ、進退八・九度人家漂流、残る家僅六・七十軒溺死の男女宇佐福嶋を合して七十余人なりき、都而宇佐の地勢ハ前高く後低く、東ハ岩崎西ハ福嶋の低ミより汐先



図 2-6 土佐市関連地図

逃路を取巻ゆへ、むかし宝永の変ニも油断の者夥敷流死の由、今度も其遺談を信じ、取あへず山手へ逃登る者皆恙なく、衣食等調度し、又ハ狼狽て船ニのりなとせるハ流死の数を免かれず」(p.2298)

ここでは、147年前の経験が伝わっていた所もあった。

(16) 高知県須崎市(図2-7)

〔発生寺過去帳)〕○高知県須崎市鍛冶町

「注嘉永七甲寅年(安政元年)十月廿一日死亡者の次の余白に書記されて居り右記録の次より十一月五日の溺死者が記載されて居ます

○十一月四日少々地震大南潮狂ヒ込引甚急ナリ夜ニ入漸ク静マリ翌五日海上甚静ナリ同日七ッ時大地震半時バカリアリテ大塩入来其時地震ニ而家蔵潰レ地少々引サケ候ニ付浜町五六軒ノ者一同小船四五艘ニ取乗地震ノ難ヲ海上ニノガレ候場合イ大潮押来右船中ノ者大凡流失ス後世覚悟ノタメ記置右ノ内壱艘ノ船無難ニ而矢井川浦エ着其余溺死人左ニ記ス(原文のまま)」(p.2331)



図 2-7 須崎市関連地図

(17) 大分県佐伯市

〔御用日記〕佐伯毛利家文書 佐伯市教育委員会

「一御代官安藤平右衛門申聞候、米水津浦組浦代百姓和吉母当寅五拾六才罷成申候、右之者一昨五日夕七時半頃地震高汐二付、村中之者共不残山ノ手ニ立退候処、和吉母弟末吉ト申者病氣罷在候付、小船ニ乗せ連退候節、和吉母着類取出し可申旨申聞、居家江罷帰候処、船は其儘山ノ手ニ流着、右和吉母相見不申候付取驚、役人始家内親類共手分け所々吟味仕候内、翌六日朝四時半頃右浦組之内わこさと申沖ニ而宮野浦百姓共死骸見受申候、然ル処浦代百姓惣左衛門ト申者流失物拾ひ罷越居候付、為相知直様引揚候処、和吉母ニ相違無御座旨惣左衛門申之候付、何茂和吉方江連越引渡申候、折節浦廻之者共居合候付役人始親類之者共立会死骸相改候処、惣身底(疵)所等無御座溺死ニ相違無御座候」(pp.2433-2434)

3. 神様の御陰

3-1 伊勢湾(図3-1)

「一 熱田太神宮御社地震ゆらず少しも痛みなし、町家同様なり、霜月四日五時宮宿の魚獵船壱艘面上に乗出しかは、沖の方より山の如くなる大浪来るを見て、是ハ津浪なり

今逃るとも間に合す、若幸に彼大浪を乗越しなバ命ハ助かるべしとて、乗組の人々熱田神宮を伏拜ミ何卒彼大浪を乗越さしめ命助け玉ひと、一心に祈り奉り大浪に近つくと、忽ち其大浪東西にわれて中ハ堀のことくになりしかバ、船ハ其間を乗越し難なく沖の方に出けれハ、沖ハ浪静にて船人共皆口口助りけるこそ尊けれ

.....

一 桑名御城御矢倉向少々破れたるハ六月十四日の地震にて破れたるなりとぞ、今度ハ至て手軽のよし、霜月四日海上沖の方より津浪高く見へし時に桑名の産土の神多度山の方より白雲一帯棚引来りて、彼津の上にかゝると見えしが忽津浪ハ(わ)れて南北にちり、桑名へ上らずして諸人助りける、其夜も海上に神火あらはれける、それより多度山江御礼参詣の人々〔 〕せしとぞ、多度神ハ延喜式内の神社にて桑名方三里山手ニあり高山なり、爰より四日市迄の間破れ家数々見えたり (p.292)

「一 加良須大神宮(注：現在の地図には香良洲神社と表記されている)の御宮并神主家少しも地震の破損なし、其余の家々多く砕けたり、此所の本村矢野村も人家多く砕けたるに怪我人一人もなし、四日五時地震の後

に海上沖の方に津浪高く見えしが、白張着た

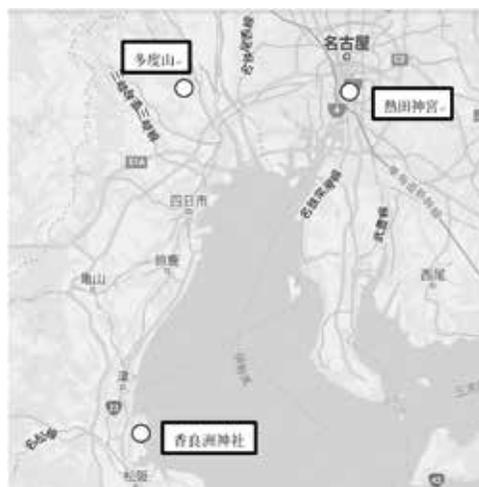


図 3-1 伊勢湾内関連地図

る神白馬に乗玉ひて海上に顕ハれ給へしかば、其津浪忽われて南北に別れからすの浦に上らずして、人々多く助けける、神の御出現ハ松坂よりよく拜まれたるよし、誠に有難き事なり、加良須大神宮御神馬ハ木馬にて白馬に追りたるなれ共、津浪の後に見れハ四足の蹄に海中の藻くず付てありける、又御本社の御厩も同様に海中の藻くず付て口しよし、是全く海中へ御出現のしるしなり、矢野村ハ前に荒悔を抱き後に雲津川の高堤を負ひて洪水の時ニハ危き所なる処昔より此所まで堤の切れたる事ハ絶て無しといへり、是も神の御守護なる事疑へ無し、此御宮廿一年目式年の御立替にて内外両宮と同なり、馬場の長サハ町之内両側桜の神木にて花咲く頃見事 [] とぞ、からすの浦も松原絶景にて二見ヶ浦迄見はらし []」(p.293)

3-2 友ヶ島水道 (図 3-2)

「一 霜月四日五ッ時海上沖の方より山の如く津浪高く見えし時に陸の方より何ともしれぬ白き鳥二羽海上に飛往き、津浪の上に飛かゝると見えしが忽津浪われて東西にわかれ、わかぬ浦并御城下江も津浪上らずして人々多く助けたり、是全く玉津島明神天満宮の御出現なるべくして有難き事なり、其頃若山御城下在々よりも御礼参りの人々和かの浦に群集せしとぞ」(p.294)

「一 加田淡島大明神御宮并町家地震津浪の破れ少しも無し、四日五ッ時津浪高く見へし時に海上に女体の神御馬に乗らしめ給へて御出現有しとぞ、故ニ忽に津浪割れて一方ハ大坂の方一方ハ阿州の方別れ往て加田の浦に障り無く人々助けたりとぞ有難き事なりける

見渡ば淡路が島に苦か島あまの釣舟加田の浦波」(p.295)

(注：加田は加太、淡島大明神は淡島神社、苦か島は友ヶ島であろう)

3-3 駿河湾 (図 3-3)

久能山東照宮の浜、根古谷での記録である。

「同日 (註：十一月四日)

一右大地震に付、已の一天俄に揺曇り、山々谷々は夥敷崩落、其外野畑往来平地等所々地割、土中より泥水青砂等吹出し、又磯辺通凡壱町余も暫時に潮曳、夫より津波押立、既に御山下間近くまで両度迄も押来り、右波打上げ候はば御山下は勿論、東西住居之面々、幾百之人々、是が為に一命難遁、然るに不思議成哉、其波磯辺間近にて鳴響き、左右え押分れ、ことごとく沖の方え打返して、御山下無恙、老幼に至る迄吾人も怪我無之、是全く御宮之御神徳に寄て、御山下一同其難を通る事、実に衆人眼前に其難有事いか斗りや思べし、昔し宝永之大地震之節、津波山下え押来候処、御内陳之御扉おのづから左右ニ押開、御内より白鳩二羽舞出、左右え飛分れ、其鳩之飛去候方え津波押分れて、沖の方え打返し、御山下御別条無之由、申伝へのみにて書留等無之、既に此度御唐門御拝殿御幣殿共おのづから御扉左右え押開有之事、実に不思議と申も恐多し、是等誠に御深秘之御事に候得共、其御神徳之難有事を後代御番入之人々に委しくしらしめん為、日記に書留置申候」(p.995)

このあたりを調査した羽鳥によると、津波の状況は次の通りであった。(文献 4)

「根古谷 (静岡市)

久能山与力の記録の一説に、東照宮下の状況を次のように記してある。『磯辺通凡壱町 (100m) も暫時汐ひき、夫より津波押立既ニ御山下間近くまで両度迄も押来り。』また、久能村誌に『山崩れ、而怒り、水逆巻きて東より来り、住家近く打寄たりと。この時、圧死者四、安居一、古宿一、根古谷二』とある (Fig.13)。

根古谷の旧道地盤高は、今回 T.P 上 7.6m と測量されているが、明治 43 年の地形図では、集落あたりの標高は 5m ほどであった。記録には地震被害が記され、津波の被害記事のないところから、津波による影響はほとんど受けなかったのであろう。津波の高さは 5m 程度とみなせる。」

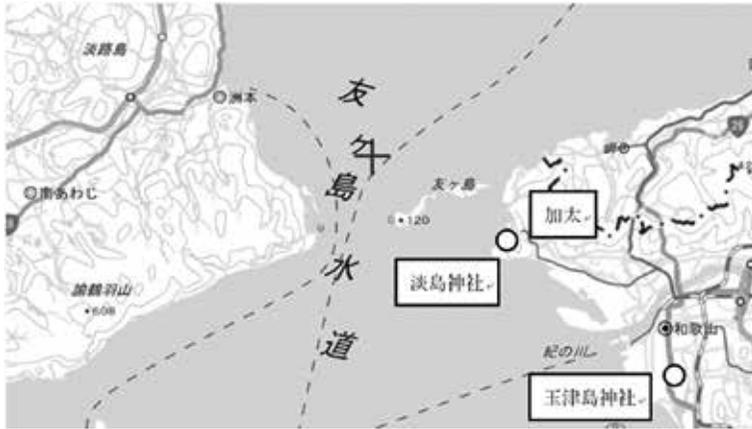


図3-2 友ヶ島水道付近関連地図



図3-3 久能山周辺関連地図

3-4 和歌山県日高郡みなべ町(図3-4)
(熊代繁里手記)

「十一月四日己巳執昨日冬至曇天辰の下剋、大地震ゆる事須叟、人々家を出て道路にたつ、漸々にして止む。其後昼夜をかけて四五度ゆる。今日朝より澳の潮水シオゆくこと、いと速く、浦回ウラの磯、須臾の間に見江かくれして潮満干潮の高低八九尺すること夕方まで七八度なり。然れども汀は常にかはることなし。此

日勝専寺の役僧、浦に出て澤水を舐り見しに吞まば吞むべくおぼ江て井の水に太イたく異ならず、いさゝか鹹シホハキのみなりしよしかたれり此潮水の動揺にて浦浪寄り来んもはかりがたしとて、夙浦の男女衣食調度を携へ悉く猪野山芝村の東にありてとりわき近しへ遁げ登る。夜に入り王子宮北道村にあり、稻荷宮南道村にあり、秋葉宮氣里村にあり、鹿島宮海中にあり等に神燈を上げ人々参詣す。もし夜中津浪寄り来んには近辺の岡山



図 3-4 みなべ町鹿島周辺関連地図(鹿島に神社の鳥居印がある)

に遁ん為とて人皆身装ひして家々に飯を炊ぎ
行厨の用意を為。

十一月五日庚午破 ツチに入る，晴天申時
大地震ゆる事甚しく，家を出て道路にたつ
に，たちかねて転ぶばかりなり。須叟して海
底鳴動して津浪寄せ来り，(南道村の浦にて
は，稻荷宮の石段一段潰り，壇田村にては椿
阪日の往來の道を越江，南谷の田地七八分
潰り，山内村にては中内まで寄せたり。大
河辺の左右の田に鱸・鯔其外海魚どもを拾
ふ。)白浪大川を浜ること雪の如し。然て引
退たる時は平常の浪打際より沖へ去ること凡
一町ばかり，又寄せ来り，如此すること三度
なり大なるは三度なれど小さきは数度に及びよしなり猪野山上
にいへり吉田村の東の岡なり山城，高見の岡墓所なり北道村にあり
法華寺の岡北道村にあり字にて寺はなし等へ郷中の人逃
上る。予は法華寺の岡に居明す。今宵は仮菴
だにせねば，霜いたく深くして衣を沾して堪
へがたし亥の下刻，また大地震ゆる，屋のよ
りはいさゝかおとれり。終夜小きは数へもし

らずゆる。此日地震にて倒れし家五軒芝村にて丹
波屋金兵衛：岩代屋茂兵衛また定吉といへるものゝ家，夙浦にて半右衛門の
家また何かいへるものゝ家津浪古老の云伝に井の水干るといへれど此
度の地震には井の水干ずされど濁りたり。又浪も前条にいへる処まで寄せた
るのみなれば，さのみ遠く逃げるに及ばざりしといへども是かるきゆゑなり。
如斯有とて後人心をゆるすべからずにて流失の家八軒壇田村に
て坂口の重兵衛の家また嘉吉・惣助・喜平次・友七等の家 山内村にては治右
衛門・弥助の家夙浦にて吉郎兵衛の家等なりなり。又庇落ち或
は傾きたる家，または納屋蔵等倒れ，或は流
失せし十余軒もあるべし。田畑の荒は山内村
にて床土流失・作土流失・汐入等合て四町余
麦生損亡二十町余，東岩代村にて作土流失五
反五畝余，麦生損亡二町四反五畝余，西岩代
村にて作土流失一反三畝，麦生損亡五町七畝
余，壇田村にて損亡三町余，気里村にて茶屋
橋此橋津浪にそこねたりの辺にて作土流失一反等なり。
夙浦にて漁舟並に漁網の流失あり。又後日に
壇田村なる枇杷山の樹残らず枯れたり，浪に
ひたりしゆゑなるべし。然れども他所に比ぶ
ればいと平穩なり。此の地かく平穩なるゆゑ

よしは、宝永四年十月四日津浪云々（中略）
 当時山内重賢が記せる書、鹿島宮神殿に納め
 あり。其の先蹤によりて、此度もおなじ神の
 守護によれるなり。其の証徴は申剋津浪寄せ来ん
とするときばかり、未申の方の海上に火柱たつと
 見しに、忽津浪よせたるを猪野山にて前の四日に
逃げ登りし今日まで居たる人の見しに、かの大浪、澳よ
 り寄せ来り、鹿島の御山にあたれるが、大砲
 の音して二つに破れ、彼の宝永の時の如く大
 小にわかれて大なるは田辺澳へとゆき、小き
 は此浦によせつと語れり。夜に入り、右の御
 山より神火大き遠見駒の如し出て海上にうかび、守
 護し給ふこと終夜なり。」(pp.1603-1604)

宝永の津波については、みなべ観光協会の
 hp（文献5）に次のように書かれている。

「伝説の神の島 鹿島（かしま）

江戸のむかし、八代将軍徳川吉宗が紀州藩
 氏の頃、日本最大級の地震『宝永の大地震』
 が日本列島を襲いました。続いて太平洋沿岸
 では引き潮がおこり、大津波で付近の村々は
 寛大な被害を蒙りました。当時の記録では鹿
 島から巨大な鬼火が現れ、島が大津波を二つ
 に分け、みなべの郷を守ったことから翌年、
 神恩感謝の花火を村人が奉納し、毎年8月1
 日に盛大に行われる鹿島奉納花火祭へと引き
 継がれています。」

3-5 考察

以上3-1, 3-2, 3-3に引用した現象は、一
 つには周辺海底地形の影響で生じたものであ
 ろう。海岸に直に海谷があれば、津波は岸に
 近づきながら浅い方へと向きを変えるから、
 二つに割れて左右に分かれて行ったと理解で
 きる。

二つ目には、規模の大きな波動現象である
 津波の、その入れ物である湾内での振動の関
 係であろう。反射して帰る津波と、入射して
 くる津波が重複すると、振動の節に当たるよ
 うな場所では水位は上がり、水平方向の流れ
 が強い状況になる。

これら二つは詳細な深淺図を使った数値計
 算で確かめ得る。

3-4のみなべ町鹿島の場合も海底地形が原



図3-5 鹿島周辺の深淺図

因であるが、他の3例とは異なっている。岸
 から離れた島の背後には、湘南の江ノ島のよ
 うに陸繋砂州（トンボロ）が発達していると、
 津波は浅い方へと回り込むから、島は津波を
 防いではくれない。

そこで、みなべ町鹿島周辺の深淺図を、災
 害科学菅原大助准教授に作って貰ったのが図
 3-5である。

埴田（はねた）崎の前には水深40mの谷
 が入り込んでいる。このため、津波は大きく
 は回り込まなかったと考えられる。

4. 瀬戸内海でのスロッシング

液体を入れた容器が振動すると、中の液体
 が大きく揺れ動く。これがスロッシングであ
 る。安政地震の記録の、「肥壺ノ溜水ハ左右
 ニ逆浪ヲ起シテハ溢レ出テ、殆ント尽クルニ
 至レリ」や、地震時の石油タンクなどでの現
 象がこれである。閉鎖水域である池や湖での
 振動も良く知られており、時にはセイシュと
 も呼ばれている。瀬戸内海全体が一様に揺さ
 ぶられるようなことはないが、島が密集した
 やや閉じた水域や、水路のような形態の場所
 ではスロッシングと思われる現象が発生して
 いる。その場所は図4-1に見るように、岡山
 県や広島県で、外海から侵入した津波の影響



図 4-1 スロッシングが発生したと思われる岡山県と広島県

とは考えにくい場所である。地震とともに発生するので、津波から避難する余裕はない。

4-1 岡山県瀬溝海峡

〔改訂 邑久郡史 下〕○岡山県 S29.10.31 小林久磨雄編邑久郡史刊行会によれば、

「六 安政元年十一月五日

十一月五日晩刻より大地震、神崎大水門の饅頭形崩壊、土地陥落のため人家倒潰するもの多し。この震災の直前藩札通用禁止の沙汰あり、人心動揺を極む。

安政元年十一月の地震は未聞の震動にして、村内各戸屋外に藁屋を掛け土上に畳を敷き、其上に起臥し、傍に竈を築きて飲食物を炊ぎ以て火災を予防し圧死をさくるの場所とせり。この震動は殆ど三十日間に亙り其間職業は更なり、夜中安眠さへ為し能はざりしも、幸に人畜の負傷なし。

(尾張村記録)

五日七ツ大地震、皆々狼狽廻り其時南方パチ々々と鳴る音を聞きて恐れ入る。其夜海嘯あげ心配致し、後日度々揺する、(小津村古老間書)

此度の地震、御国にては古来より承伝不申程の儀にて、郡内の内場所により震動の軽重は御座候へ共、一同恐怖仕山寄の処は山へ登り、或は野中に小屋掛など仕逃居申様子に御座候、上道郡沖新田堤筋破損仕、其外少々宛の破損潰家等も可有御座、尤人牛等は別条無之趣相聞申候、今日に至り候ても兎角震動の気味相止不申、此末如何可有御座候哉、何分御邦奉行御耶目付共心付候様甲聞置候。(留帳)

安政元寅年劇震の際海嘯の徴あり。一昼夜間に潮水の進退凡二三寸度、満潮の時一時平水より凡七尺余を増し、之れがため瀬溝海峡の如きは、凡そ三尺余の土砂を以て填塞し、扇浜は泥土二尺余を埋塞せり。三百余石積の船舶を碇泊せしも、今は漁船を入れるのみ。(虫明村記録)」(pp.1683-1684)

〔倉敷市史 五冊〕(S48.8.29 名著出版)には、地が何度も揺れたこと、大音響が数度鳴り響いたこと、潮の異常があった事が記されている。

「甲寅大地震 嘉永七年甲寅(二五一四)十一月地方稀有の大地震あり。



図4-2 瀬溝海峡位置図

一嘉永七寅十一月四日朝五ッ過比大地震、五日晚七ッ半比格別ニ大地震、其節前ニより大造ニ候、同月夕五ッ時、又大地震、其間々ニ小キ分ハ数不知、五日七ッ半大地震ヨリ翌六日暁迄ニは、凡三十五六度、間ニは小キ分共ニハ五六十度も有之など申候、六日七日同様、尤、追々小くハ成申候、平場之村々ハ三四夕(マ)程ッハ、外庭ニ小屋掛、昼夜住居、間ニハ十四五日も外住居ニ仕候者も有之、後ニハ昼夜ニ五度七度、十一月末ヨリ十二月ニ成候而ハ、二日ニ壹度、又三日ニ壹度、又一日ニ貳三度も有之時も有」(p.1686)

「一大地震後、十一月廿五日、朝ヨリ八ッ比迄、大成音、地江響キ、数十度鳴渡リ、其音、此辺計ニ無之、追々聞合候ニ、上下ハ不及申、松山奥辺迄も同様書候趣、其時分、いか様の変事有之哉と、惣方心配、跡ニ而承り候得は、海の鳴たる由、尤所々津波有之沙汰、此津波ニて大坂、伊勢、其外海岸ハ大損之由児嶋郡(註：岡山市)ニて朔日志ほヨリ壹丈五六尺高く来ると後日ニ承り候

一五日大地震の節、当所(川入)ヨリ未申ニ当リ、日吉、八王寺辺ニ大ニ声立、何事と思ふ内ニゆり出し申候、其節諸方之声、甚恐敷声に候、則其時ヨリ夜通し、六日昼、同夜七ッ比迄も、宮寺山伏祈禱、村方にてハ銘々寄合祈禱村々少しの間も止時なし、昼夜大鼓、ほら、不相止、いづれも生たる心地ハなしと言一地震もゆりく時分ニハ大キ成音のする物

也」(p.1687)

横溝海峡とは、現在邑久長島大橋(別名人間回復の橋)が架かっている海峡である。スロッシングによる海水振動か。隣接する倉敷市では地震のことのみで海の動きには全く言及していないが、現岡山市南区福浜町である御津郡福濱村の〔福濱村誌〕(岡山県御津郡S2・12・15 御津郡福濱村役場)には、

「嘉永六年十一月五日 四時頃地大に震ふ津浪また至る。」(p.1701)と記されている。

4-2 広島県

〔広島県の地震〕広島市消防局には

「(前略)この地方、この地震による被害の詳細については、芸藩志(一卷)に、幕府への報告書の覚として残っています。

十一月四日俄然大地震を發す。同五日も亦大震す。余震は翌春に至って止む。此時当藩境内に係る損害は頗る夥多なりしといへとも幸にして人畜の死傷に至らず。……

肥壺ノ溜水ハ左右ニ逆浪ヲ起シテハ溢レ出テ、殆ント尽クルニ至レリ、」(p.1704)

「嘉永七年寅霜月五日 昼九ッ時長し初メ夕七ッ時大古より出しもなき事大志し大極々又夕六時又大トゆり大極こく大夜も廿三ゆり奥(カ)より沖ほどひどし」(p.1705)

〔村上家乗〕広島大学文学部

「七日一昨夕之大地震以来川口潮汐之満干難定、夜中は一円満干無之、昼之内は兩三回も満干有之今以其通り之由也」

(p.1740)

広島市の南岸近くには図 4-3 に示すように、島々があり、半閉鎖的水域があるので、ここで発生した震動であるかもしれない。

〔部 寄〕 山口県文書館・毛利家文庫

「(嘉永七年十一月十七日条)

寅十一月十七日山代御代官方差出之芸州**広嶋**当月三日の夜四半時頃地震仕、翌四日朝五ッ時過頃又々震り候にて、夫方五日の夕方七半時頃殊の外の大地震にて、……………

四日・五日頃海中汐時定り兼、嶋々は高汐の由相聞申候、岩国方も都合同様の由に相聞候処、広嶋方は少々はかろけに相聞候、……………

右過る三日方の大地震、広嶋・岩国方前書の通相聞候て此段御注進申上候 以上

寅十一月 打廻り

山崎八郎次」(p.1777)

「一中其外家込み処は平地の処へ疊其外持出五日の夜を明し致、怪我人等も無之候へ共、波野市御高札場玉垣・諸村社屋柵玉垣等損、其外古家瓦杯落又は大垂損し候類間々有



図 4-3 広島市周辺地図

之由同断

一海辺五日の夜以来不時に汐満干度々有之候間、同夜干汐に六尺位も満上り、六日迄も少々宛汐の動有之候由同断

一麻里府(註：まりふ。現 山口県岩国市麻里布町) 塩浜地場沖ノ手式三筋も割れ、猶平生横浜地場所々水吹出し、台坪等も痛み其外少々宛の損しは間々有之由同断

一前断地震に付、宰判中為安全麻二村高松八幡宮におゐて六日方二夜三日の御祈禱執行仕被遣、右村々も氏神其外は御祈禱執行仕候由同断

右の通宰判所方昼夜飛脚を以只今遂注進追々に付御届仕候 以上

十一月十八日

馬屋原良蔵」

(p.1783)

5. ドの坂

津波に囚んだ地名はあちこちにある。

例えば、徳島縣牟岐町では、

「(六) 災害

安政元年(一八五四)の津波の記録によると、内妻村においては、農家が一三軒流れ、二軒が潰れたと記されている。

このとき潮が現在の公民館の下、国道のところまできて、土堤を越そうとしたので、今もここを「こえこえ坂」といつている。」

(pp.1870-1872) (図 5-1)

和歌山県新庄町では多くの地名が安政津波に関連している。その中で最も知られている



図 5-1 牟岐町内妻位置図

のが下の坂、あるいは堂の坂であろう。

新収日本地震史料第5巻別巻5-2のp.1593に、和歌山県の田辺文化財誌の次のような記述がある。

「(新庄町における安政、南海、チリー地震による津波の高さの測定) 吉信英二著(文献6)

3 新庄町東光寺え登る石段の下から二段目。

名喜里から跡の浦え越す小さい坂を俗に堂坂といひ、東光寺は堂坂から石段を築いて本堂に通ずるのであるこの石段は安政津波以後工事を加えたのでどの段であったかはつきりしないが東光寺今西老僧の話から推量して下から二段目と三段目とを計測した。二段目で測量した潮の高さ・・12.639m 三段目で測量した潮の高さ・・12.959m・・・・

附記

口碑によると跡の浦から来た波と、名喜里谷から押し上った波とが、ここで合したということである又西跡の浦塩崎氏裏山の口碑による計測値と東光寺石段に残る口碑の計測値が殆んど近似している点と両地の地形及一万分の一等高線図(堂坂は15m以下の高さ)から推断して、大体この口碑は正しいものと思はれる。」

この堂坂は、かつては、下の坂と呼ばれていたらしい。

昭和21年(1946年)12月21日の昭和南海地震津波に襲われた田辺市では、福嶋右衛門氏が「昭和の津浪」(文献7)を執筆され、昭和26年(1951年)に当時の新庄村公民館が刊行したという。その原本を入手することは困難だが、復刻版が平成11年(1999年)に出され、津波デジタルライブラリーから入手出来る。

それによると、宝永の津浪に対し、次のような説明がある。

「宝永四年の地震津浪(西暦1707年)

宝永四年十月四日(陽暦十月二十八日)の未の上刻(午後二時)、田邊に大地震あり、倒壊家屋多く、次で海嘯起り、江川浦は殆ん

ど流失、本町、紺屋町、片町は、過半流失し、溺死者廿三人に上つた。宝永四年十月四日、大地震大波書上、田辺組(田所氏交書)によれば新庄村は、流家百八十五軒、流稻屋百九十六軒、流牛屋四十軒、流藏五軒、御藏流二軒と書き上げてある。この災害は、安政の地震津浪と共に、大きなもの一つである。

蓋し、この時の地震は、伊豆から日向に至る間、太平洋岸及び其の附近を中心とする大振動で、其の区域は、東海、畿内、山陽、南海、九州東部に亘っている。同時に、沿海の地は、概ね大津浪を伴い、潰滅家屋二万九千戸、死者四千九百人と註せられ、就中、土佐が最も甚だしかつたが、**當村では、文里の波と跡の浦の波が、東光寺のどの坂で、打ち合ったと言ひ傳えられている。**」

さらに、「津波と地名」という章がある。

「津波と地名

これは新庄の古老たちの語りぐさのなかから津波と地名との関わりについて抄出したものである。

クギヌキ峠 東山町二丁目五番地付近

津波で流され、壊れた船体の釘をぬいたところから。

ヨビアゲジソウ 新庄町四七〇付近 紀伊新庄駅裏山

津波の時 地蔵さんが「こっちへ来い、こっちへ来い……」と鐘を叩いて呼び上げ誘導してくれたところから。

コギ谷 新庄町八〇〇番地奥の谷

津波で流されてきた船を再び漕ぎ出したところから。

下の坂 新庄町東光寺前

名喜里からの波と跡ノ浦からの波が「どーん」と打ち合ったところから。

ナグイ 新庄町三〇八七番地付近

避難者が流れてきた魚を食したところから。

サンジョガシマ 新庄町内ノ浦

安政の津波の時、三人の女の溺死者が発見されたところから。

ツボ 新庄町鳥ノ巣三九九一番地

内ノ浦湾にあふれた津波が鳥ノ巣半島

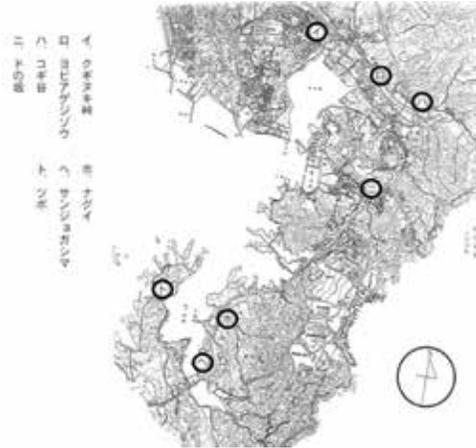


図 5-2 新庄町の津波関連地名

のくぼんだところから、神島の方の浜へむけて滝のように流れ出し、滝壺ができたところから。」
それらの位置を図 5-2 のように示してある。

東光寺の碑については、寺社・石碑データベース（文献 8）から見る事が出来る。東光寺山門と碑の映った写真、碑文の写真があり、次の説明がついている。

「碑文 寶永の津浪潮位（推定）

碑文縁起（表） 寶永の津浪潮位（推定）
海拔 12 メートル 79 昔この位置に峠道あり
寶永（西暦 1707 年）の津波 右からの波と左からの波が、ここで打ち合ったという ちなみに 安政（西暦 1854 年）之津波は、これより 5m 程度（推定）低く（推定）昭和（西暦 1946 年）の津波は、これより 9 メートル 23 低い潮位であった 平成 10 年田辺市新庄公民館記

建立時期 H10」

6. 最古の高地移転（図 6-1）

安政の津波は、三重県鳥羽市国崎町を襲っている。例えば〔外宮子良館日記〕の記述として

「但し右調進の者咄しに、先日の津波国崎村に有之候高さ七尺五寸の大岩の上に御座候タテ臼^(カ)も有之松を打越、枝等一切無

之、併村方に流れ候家は二軒の由、コウカ村四百軒の処三百軒余流れ大サツ^(マ)同様の由、其余村々嶋々何れも家流、無難の家は無之、今に平生の汐分余程高満致し候由」(p.1273)と書かれている。

国崎周辺の津波高、被害状況を羽鳥の調査（文献 9）により調べてみると、

北側の浦村では、「134 戸の村、10 軒倒れ、あとは残らず流失。今浦大江寺前に波先を示す碑、本浦清岩庵に津波碑。安政津波の高さ 5m」、

国崎では、「残らず波打ちしが流家なし、安政津波の高さ 6m」、

そして、南側の相差では、「100 軒余流失、のこり 50～60 軒大破。安政津波の高さ 6～7m」となっており、南北両村と同程度の津波で有りながら、国崎には家屋被害はない。

所が、新収日本地震史料第 5 巻別巻 5-1、pp.1268-1269 には、三重県の津浪記念碑として、次のような僅か 2、3 行の記述がある。すなわち、

「〔増補 国崎神戸誌全〕○三重県 S10.2.10 酒井錠吉郎編
（津浪記念碑）

安政元年十一月四日地震津浪高波坂森城山ノ高地ニ達シ崎ノ宮ニ社民家四棟流失死者六人漁船漁網ハ大半ヲ失ヒ沿海ノ田畑ノ被害甚シ」

とあり、流失家屋数に違いがあるが、被害は僅かであったと記念碑に刻まれているようである。なぜ、被害が隣村とは比べようもなく小さいのに、此処に津波記念碑があるのだろうか。

そこで、この記念碑の原文を探すと、以下の通りであった（文献 10）。

「津波流失塔

所在地 location：三重県鳥羽市国崎町 常福寺境内

津波の年代 Year of the tsunami：安政元（嘉永 7, 1854）年

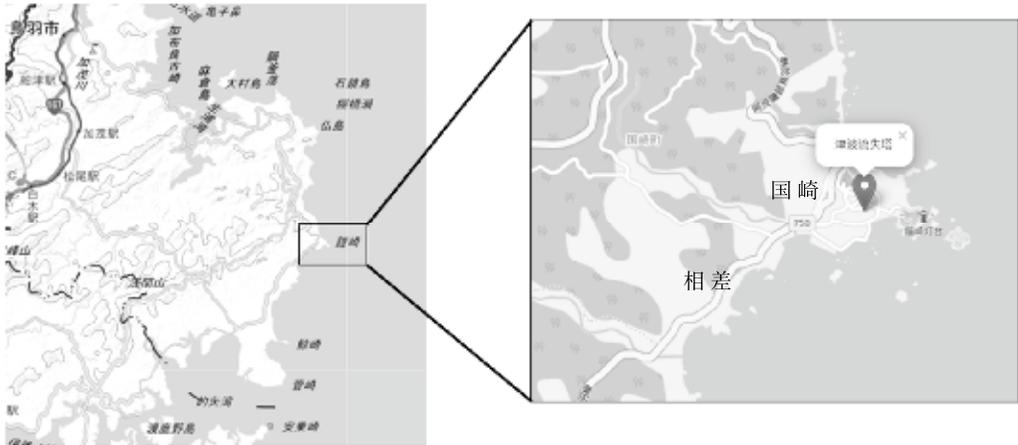


図 6-1 左図 鳥羽市国崎町位置図, 右図 常福寺津波流失塔位置 (文献 10 より)

碑文

碑文縁起 (表)

維持安政元寅霜月四日五時大地震 [暫] 大津波五後四 [辺] 有之 於當村浪高参間而七丈五尺 之及家数四軒流失 從其崎宮二社流失之 有城山坂森両山打越 教船并網致流失 濱手田畑荒数ヶ所 流死六人 右為水世此 処立置 諸人者見之可有心得事書記畢

碑文縁起 (裏)

(右側面) 暫 安政四己年

施主 當村

庄屋 藤右エ門

肝 [煎] 三六右エ門

惣代 忠作

同 新蔵

となっており、被害はあったが、それほど大きくはなかったと読み取れる。

ついで、この流失塔をネットで更に検索すると、次の2つが出てきた。被害が大きくなかった原因は 1948 年明応地震津波後の高地移転であったという。

まず、日本経済新聞の記事 (文献 11) は

「■ 500 年間続く慣習

集団移住の歴史は古い。三重県鳥羽市に『高台に集団移住した国内最古の例』という集落がある。伊勢神宮に献上する熨斗 (のし) あ

わびで知られる国崎町で、約 1 万人が犠牲になった 1498 年の大津波の後、海辺から高台に移った。

ここでは 500 年たった今も海辺に民家はほとんどない。国崎町の歴史に詳しい常福寺の華谷賢光住職は『この辺りでは津波の教訓から家は高台に建てるのがしきたりで、漁師も高台から浜に通うのが普通になっている』と話す。」

もう一つは、土木学会中部支部の活動に関するものであった (文献 12)。

「3. 「津波流失塔」安政津波

所在地 三重県鳥羽市国崎町 377 常福寺

tel 0599-33-6157

こくないさいこ しゅうだんいてんち
国内最古の集団移転地

津波流失塔碑には、彦間と呼ばれる近くの海岸に七丈五尺 (約 22.5m) の津波が押し寄せたが、犠牲者は 6 名のみであったと記されている。これは、明応地震のあと平野部にあった集落が常福寺共々高台の国崎に集団移転していたからといわれている。

所在地 三重県鳥羽市浦村町今浦錦照山大江寺の前 tel 0599-32-5109」

この辺の事情は都司嘉宣が文献 13 の中で

に詳しく述べている。その「第 3 章 安政東海地震・安政南海地震の災害教訓例 第 6 節 古代・中世の倒壊地震・南海地震の伝承の中から」を全文引用する。

「2. 地震津波の災害教訓の古い例・その 2
—明応 7 (1498) 年東海地震による志摩国大津集落の高所移転—

三重県鳥羽市国崎 (くざき) は志摩半島先端部海岸の鎧崎の基部に位置している小集落である。東海沖の海域に面しているため、歴代の東海地震の津波による被災を繰り返してきた。国崎は平安時代を通じて伊勢神宮の神戸として存続し続けたことが文献的に証明されている (都司, 1999)。平安時代の末期、国崎の集落は、平野部の大津集落と、丘の上の国崎の 2 つの『神戸』、すなわち伊勢神宮の直轄領集落に分離した。この分離した『大津神戸』が、鎌倉時代を経て、南北朝時代にまで存続したことは、正中元 (1324) 年 12 月の『二所太神宮神人解案 J 及び『制止状』 (『市史』, 上巻, 731 頁) に『大津国崎神戸』とあること等から明らかである。この国崎から分離して平野部にあった大津が明応東海地震の津波によって壊滅する。すなわち、『鳥羽誌』 (明治 44 (1911) 年, 曾我部市太編) の宝剣山常福寺の説明文に『旧時大津国崎の二神戸に分かれし時、此の寺大津に属し天通山と号す。明応七年八月海嘯のため、大津の地流失せしを以て字里谷に移す』とありである。さらに『増補・国崎神戸誌』には、『大津は (中略) 明応七年八月津浪の為に荒廃し更に国崎と合併せりとの口碑を存す』と記されている。

大津にあった月読神社については、『旧月読ノ宮社』 (中略) 口碑に云。この社は往古大津神戸の氏神として奉祈せしが明応七年八月津浪の災後、大津神戸は移転して国崎神戸に合したるも当社はその境内社稀人神社とともに宇大津の田圃の間に残存せしなり』と記されている。すなわち、神社だけは移転せず、田畑地に戻った旧大津の場所にそのまま存在している、というのである。

以上、明応津波 (1498) によって大津神戸の集落が壊滅し、生存者たちは寺とともに国崎に合併移転し、もとの大津の市街地は放棄され田畑地に帰したことが判明する。

国崎は古来耕作地の面積が少なく、伊勢神宮への貢納物がアワビ、塩、鯛などの水産物であったことからわかるように、海からの産物の採取を主たる産業とする集落であった。にもかかわらず、居住地の標高が高いということは、日々の生業の不便を忍んで生活してきたことを意味する。

大津の集落は失われて 600 年余りを経過したが、そのあった場所は、江戸時代の絵図

(『市史』所載)、地元伝承、月読神社の故地、小字名などから現代の地図上にその位置をほぼ推定しうる。国崎の集落を海岸に下り、海岸道路を西に進むと小さな川にかかった『大津橋』に出る。この川にそっては西に向かう小平野が開けている。この小平野が大津の故地である。地図でわかるように現在もこの小平野にはわずか 1, 2 軒の家屋が点在するのみである。

この小平野は現在の国崎漁港をすぐ目の前に見る位置に広がっている。大津の原義は、「大きな港」である。国崎漁港は鎧岬の背後に位置し、岩礁群によって沖の荒波が防がれ天然の良港をなしている。この港のことを讃えて大津の名を生じたと考えて差し支えあるまい。当然、この小平野に居住地をおいた方が漁業を主産業とする生活には便利である。すなわち、この小平野の方が標高が低く漁港に近く、住居の敷地に供することのできるゆったりとした土地が得やすい。さらに、生活水を得やすく、背後地での農業にも便利である。しかるに、国崎の人々は明応地震津波 (1498) 以来 600 年余りにもわたって、大津の故地の小平野部に居住家屋を造らなかつた。土地の狭い、標高の高い国崎に不便を忍んで住み続けたのである。これはなぜであろうか。

その答えは自明であろう。明応津波の被災を体験した大津の人々は、平野部に居住地を築けば、将来大きな津波が起きれば集落が壊

減してしまう、という教訓を得た。その教訓を人々は500年余りの年月、決して忘れなかった。明応地震津波(1498)の生存者たちは、不便を承知で、高地居住して残った隣の国崎の本神戸の集落に合併し、ぎっしりと家を並べて住み始めた。寺もまた大津の故地をすて、岩の台地の上に移転した。こうして住民たちは、日常の不便と引き替えに、津波からの永遠の安全を得たのだ、と推定される。

明応地震から209年たった宝永4(1707)年10月4日の午後4時頃、国崎は宝永地震の津波に襲われた。この津波による被害は、国崎では漁具と漁船、及び田畑の被害のみにとどまり、家屋、人身の被害を生じなかった(「市史」)。

幕末の安政東海地震(1854)の津波では、国崎は『津波の特異点』となり、潮の高さは城山、坂森山を打ち越えて『彦間にて七丈五尺』(22.7m)であったと、『常福寺津波流失塔』の碑文に記されている。しかるに、その被害は、わずかに『家四軒、宮二軒』にとどまり、溺死者も6名にとどまった。20m以上という大きな津波浸水高さに比して、非常に小さな被害にとどまった、ということができる。

以上のように、国崎の集落の高地移転は、江戸時代の2大津波に対しても、ともに大きな効果を発揮していたことが判明する。また、江戸時代のこれら2度の津波の経験が更に大津の低地へ住居を建ててはいけないという教訓への確信をかためさせたと推定される。

三陸海岸地方では明治三陸津波(1896)、あるいは昭和三陸津波(1933)の後、多数の集落が高地移転を実施している。漁業を主体とする日常生活の不便を忍んで現在まで高所居住を堅持している集落もあるが、中には永年のうちに不便に抗しきれず、あるいは防災意識が希薄化して低所に再移転し、海辺に集落を戻してしまった例もある。

いま、ここに取り上げた志摩国の国崎は、500年も昔に津波対策としての高地移転を実施し、現代まで守り通して、江戸時代には2度の大きな津波に際して極めて有効に災害軽

減を達成した。鳥羽市国崎は、高所集落移転の非常に古い成功事例として、津波防災対策の見地から大きな賞賛に値するものであろう。」

7. 世間の噂話

安政の地震とは云うが、実は嘉永年間に生じたもので、その後で安政と改元されたのであった。湯村哲男(文献14)は次のように述べている。『安政元年の大地震』といわれている古今未曾有の大地震が発生したのは、安政年間ではなく、嘉永7年11月4日であり、この大地震後、11月27日に改元されて安政となつたのである。したがって、通称『安政大地震』は、本来ならば『嘉永の大地震』と称されるべきである。地震に関する記録が地震後ある程度世情が安定した安政年間になつて記録されたため、この名称が生まれたものであろう。このような例は他にも多く見られ、地震等による自然災害後改元されることは過去に多く見られる。』

しかし、世に出回った狂歌には、元号を変えた後で地震が発生したように読めるものがある。

例えば、〔菊川町史〕○静岡県小笠郡S40.9.13町史編纂委員会には、

「安政の地震 嘉永七年十一月四日(安政と改元は十一月二十二日)数日前から大音が轟々と鳴ったから、人々が茫然不思議がって暮らす内に、大地が振動しだして大地震……当時の地口に『安政とかえたとたん大地震、こんなことなら嘉永でもよかった』というのがあった。」(p.1053)

また、〔真庭郡誌〕○岡山県T12.1.10 真庭郡役所にも、

「安政元年甲寅十一月五日 地震

此の暁七ツ時大に震ふ、是より以後数日の間小震あり当時古老の説く所壯年以来今回の如き大震に接せずと、備前西大寺の人の狂歌あり。

安政になった年から大地震こんな事なら嘉

永でもよし。」(p.1702)

その他にもあちこちに狂歌や戯れ唄はある。

〔大地震ニ付諸国方御届写〕小川紀子氏提供

「嘉永七年歳次甲寅

十二月七日写之

大地震ニ付諸国方御届写 在府中弓田村
稲葉氏書

.....

一 異国船ニ而老人, 子供三人程助ヶ候由,
尤異人老人流死, 怪我人ハ六七人も御座候由,
大船大損し, 舟底方水入, 昼夜異人百五六十
人宛ニ而水車を仕掛ケ水を舟之両方江かひ出
し候由, 少シ之間も休事出来不申, 大難義之
由, 食料も乏しく相成候由ニ御座候,

.....

御わらひ

加嶋から手紙で来ても能キものを, 自身ニ
来てハ諸国なんぢふ」(p.271)

千葉県旭市の〔旭市史二巻 近世北部史料
編〕S48 旭市史編さん委員会には

「(地震道中記)

一 四日市六月十四日の地震に人家多く潰
れ, 火災となりて死人二百人余といふ説なり
しが, 今度又々大地震ニ而三分通りの破損な
り, 今度ハ死人なし, 一年両度の大地震其難
渋思ひやられたり, 爰より京都迄東海道の内
ハ破れ少し, 山田街道〔 〕白子上野津の町
辺破れ家多し, 津の町ゑんま常の辺殊に大破
也, 爰ハ阿漕が浦平次の古跡なりければ伊勢
の海阿漕か浦にゆるなるも 度重なれハ破ら
れにけり

古語に地しんをなみといふなり」(p.292)

〔日高郡誌 上〕○和歌山県 T13 日高
郡役所には,

「(熊代繁里手記)

玉ちはふ神のみいづはたかなみの かゝる
をりにぞあらはれにける
大波をせきとじめしやことむけの かみよ
ながらのみいづなるらむ

かしまがた山より高きたかなみを くゑは
らゝかし神ぞしづめし

みなへの浦残る家居やまれならむ かしま
の神のまもらざりせば」(pp.1604-1605)

〔岡長平著作集 五〕○岡山 S52.11.1 岡
山日々新聞社には,

「安政の時には, 余震が一月も続いた
ので, 札潰れでうけた衝撃を, さらに, 余震
が動揺させたのだから, 忘れるに忘れられぬ
印象を, 深く刻みこんだようである。地震
としては, たいしたことはなかったらしいが,
そんなことで, 安政の大地震は, 岡山の名物
的トピック・ニュースになった。落首なん
かも, たくさんある。

安政^前と, いわぬ先から 自信^{地震}より, 口
をあけたる, 床^(とこ)の建付

改元はその月の二十七日だから地震の折は, 嘉永七年

安政に, なっても地震はおさまらず, いっ
そ, これなら, かええ^{嘉永}でもよし

西大寺町の新屋^(本姓:山津) 治右衛門, 略して「新
治」, という砂糖屋の旦那が,

新治をば, さかさ^(止まず)に読めば治新なり, 今に
びくびく, 山津^(止まず) 治右衛門

と, 書いた自作の狂歌を, 表戸にはって, 商
売を休んだ。その廉によって, 不謹慎なりと
て, 入牢を仰せつけられてる。

藤野町の, 風呂屋の勝ツァンが, 「地震万才」
という地唄^{(生田 (いくた) 流「ご万才」)}の替え歌の歌詞
を作ってる。」(pp.1680-1681)

〔浅野長愛氏所蔵文書〕広島浅野家にも,
「大地震いらさる評を書ちらし 国に費や
す筆墨紙手間

屋根ぬれハ雨のしたニは事足りぬ 主有木
にも心せよ人

君か代ハ千代も目出度大ちしん ゆったり
としたよいとしの暮

笑の跡ハ火や々々

ミよしや 和与兵衛」(p.1737)

〔洲本市史〕S49.10.30 洲本市史編さん委
員会・洲本市役所では,

「まじないに、『棟は八ツ，門は九ツ，戸は一つ，身は伊弉諾の内とこそしれ』

『揺る共，よもや抜じの要石，鹿島の神のあらぬかぎりは』 (p.1804)

「又極月（十二月）に年号を改，安政元年とかわる歌に

寅のとし，嘉永かゑいと，詔り天下泰平国家安政」 (p.1805)

〔三岐田町史〕○徳島県 T14.12.1 三岐田町には，

「地震津浪に付而歌に

ゆるぐのに四方や浮地の要石 かしまの神のあらぬかぎりを

同返事

ゆるくのになせにおさへぬ要石 かしまの神は留守か寝たのか

是も同年の地震に付而

何国もゆったりとなるしるしにや 世直しとこそ地震から云ふ

同年十二月五日年号替りて安政元年と改る付而歌に

へんな年早う嘉永と思ふたに 御代安政と替る世の中」 (pp.1849-1851)

狂歌だけではない。大津波相撲取組なども現れた。(表 7-1)

〔南北堀江誌〕○大阪市 S4・6・30 蒲田利郎篇・南北堀江誌刊行会には，(安政年表)のうちに，表 7-1 が記載されている。(p.1511)

8. おわりに

今では安政南海地震，安政東海地震と云っているが，実際には嘉永年間のことであり，これらの地震や異国船到来が改元のきっかけであることは忘れられているのではなかろうか。

人間は忘れやすい。大阪の例では 150 年前と全く同じ形で犠牲者が出た。ところが 500 年以上も前の経験を守り，高地居住の不便に耐えている住み着き方もある。毎日自然と接触した生活の方が体験を継続するのであろう。

参考文献

1. 学芸員 木村慎平：「青窓紀聞」解題，名古屋市蓬左文庫 http://housa.city.nagoya.jp/archive/deta/20180403_8.pdf
2. 高野 明・島田陽訳：ゴンチャローフ日本渡航記，新異国叢書 11，雄松堂書店，昭和 44 年，p.623。全頁は 753p。
3. 宇佐美龍夫：新編日本被害地震総覧，p.120，1996 年

表 7-1 大津波相撲取組

人の山	大群衆	大弱り	船持	大損し	荷流し	大泣	荷主山	船話り	大黒橋	雷の音	沖鳴	大津波相撲取組
引船	多人力	大破損	掛造り	半崩れ	金谷橋	大潰り	勘助島	微塵	小舟皆	逆巻	大津浪	頭取
		町流	水勢			人流し	割茶舟	皆損し	問屋海	落橋	早浪	漆荒右衛門
		蔵	浜			橋	跡	大川		敷	大	響瀧浪之助

4. 羽鳥徳太郎：静岡県沿岸における宝永・安政東海地震の調査，地震研究所彙報，Vol.52, pp.407-439, 1977.
5. みなべ観光協会 <https://www.minabe-kanko.jp/sightseeing/1306>
6. 吉信英二：新庄町に於ける安政，南海，チリー地震による津波の高さの測定，田辺市文化財誌，pp.14-19, 1961
7. 昭和の津波，復刻版 編集発行者 田辺市新庄公民館・昭和の津浪復刻委員会，1999，<http://tsunami-dl.jp/document/087>
8. 津波の記憶を刻む文化遺産 一 寺社・石碑データベース - sekihi.minpaku.ac.jp/spots/view/5690
9. 羽鳥徳太郎：三重県沿岸における宝永・安政・東海地震の津波調査，地震研究所彙報，Vol.53, pp.1191-1225, 1978
10. 津波の記憶を刻む文化遺産 一 寺社・石碑データベース - sekihi.minpaku.ac.jp/spots/view/5070
11. 日本経済新聞 https://www.nikkei.com/article/DGXNASFB2204B_S1A920C1940M00/
12. 土木学会中部支部 巨大災害タスクホース現地視察 ～歴史的大津波の爪痕と防災町づくりを訪ねて～ <http://www.nhri.jp/TF/TourPlan20121214.pdf>
13. 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会：1854 安政東海地震・安政南海地震報告書 平成十七年三月，pp.101-102。
14. 湯村哲男 (1969)：本邦における被害地震の日本歴について，地震第 2 輯 第 22 卷，pp.253-255